

7 月第 2 週の礼拝説教

- 日 時：2023 年 7 月 9 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 7 主日
- 説 教： 保科けい子 牧師
- 説教題：「あなたも家族も」
- 聖 書：使徒言行録 16 章 25～34 節（新約 p246）
- 讃美歌：2「聖なるみ神は われらの集いに」
451「くすしきみ恵み」

先週は、7月6日から7日にかけて立川も暑い日が続きました。7日のことだと思いますが、ニュースで、私が立川教会に来る前に住んでいました福島市の駅前広場の様子とそこに設置されている温度計の映像が流れました。午前11時台ですでに35.7度と表示されていました。おそらく、午後には37度まで上昇したと思います。広場はバスプールにもなっていますので、日曜日は主日礼拝が終わると、私はそこに福島荒井教会の近くのバス停から40分ぐらいかけてバスで帰ってきていました。教会の方に車で福島駅まで乗せていただくこともありました。ですから、夏の暑い日にはその温度計の表示が40度を超えているのも何回か見たことがあります。設置されている場所が、夏は日差しが強く照り返しがあり冬は風が強く吹きすさぶ状態でしたから、私などの体感温度や気象庁の測定温度などとは2,3度違っていたと思います。いずれにせよ、福島市は典型的な盆地の気候であり県庁所在地でもあるのでよく報道されるようです。今回もニュースの映像を見ながら、そこにキリスト教が宣べ伝えられ、教会が作られて礼拝がささげられていることを思い、使徒言行録で語られている聖霊の働きが時代を超えて世界中に広がっていることを実感させられました。

さて、本日の聖書箇所は使徒言行録16章の25節から34節ですが、少し前の11節から使徒パウロの第二回伝道旅行におけるフィリピの町での伝道の様子が語られています。パウロたちが初めてヨーロッパ大陸に渡り、伝道したのがマケドニア州のフィリピという町でした。そこで彼らはリディアという女性と出会い、彼らの話を聞いた彼女もその家族の者も洗礼を受けて信者となりました。そして、その家が伝道の拠点となったことが15節に語られています。ヨーロッパ大陸最初のキリスト教会であるフィリピ教会の成立です。しかし、16節から24節を読みますと、その後のパウロとシラスはおかしな教えを広めて町を混乱させる者として訴えられ、捕えられて牢獄の一番奥に木の足枷をはめられて監禁されたことが記されています。それが本日の聖書箇所の背景にある出来事です。

その牢獄の中でのパウロたちの様子が25節に語られています。「真夜中ごろ、パウロ

とシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」。鞭で打たれた上に足枷をはめられて暗い牢獄の奥に捕えられている二人は、真夜中に賛美の歌を歌い神様に祈っていたのです。私たちも様々な困難や苦しみや悲しみに出会うと、たとえ夜中であっても必死に祈ることがあります。しかし、賛美の歌を歌いつつ祈っているパウロとシラスの姿には、そのような必死さを感じさせない不思議な平安が感じられます。真っ暗な牢獄の中でも、そこに静かな光があるのです。「ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」と使徒言行録が記すように、この平安と光は、彼らからこの牢獄に捕われていた全ての囚人たちにも伝わっていったのです。すると突然、大地震が起こりました。牢の土台が揺れ動いて戸はみな開き、囚人たちを繋いでいた鎖も全て外れてしまって、囚人たちが逃げ出せるような状況になりました。けれども、囚人たちは誰一人、その場を動こうとしませんでした。逃げ出す者が一人もいなかったのです。パウロたちの賛美の歌と祈りは、他の囚人たちの心をそれほどまでに深く捉え、彼等にも平安と光をもたらしていたのです。使徒言行録は、以前には「聖霊行伝」とも呼ばれていたことは何度もお話したと思います。それは、聖霊降臨によって聖霊の働きがどれほど力強くなされたかを描いているからです。そして本日の箇所では、この牢屋の中での賛美の歌と祈り、そこにある平安と光をもたらしたものが聖霊の働きであると使徒言行録の著者は考えているのです。

そして、さらに不思議な出来事が起こりました。この獄の看守とその家族のもの皆が、神を信じる者とされたのです。真夜中の大地震で目を覚ました看守は、大地震によって獄の戸がみな開いてしまったのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い自殺しかけました。なぜなら、囚人が逃亡したら看守が責任を問われ、死に至る罰を受けなければならなかったからです。彼は、そのことで恐れ絶望し自殺しようとしたのです。その彼にパウロは、「自害してはいけません。わたしたちは皆ここにいる」と声をかけました。パウロたちの賛美の歌と祈りのもたらした平安によって、囚人たちは一人も逃げ出すことなくそこに留まっていました。このことは、もはや死ぬしかないと思いつめた看守にとって、目に見える救いの出来事だったのです。パウロとシラスの静かな落ち着いた姿の前に、この看守はひれ伏し、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」と尋ねました。二人は、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」と告げました。それはおそらく、パウロとシラスがそれまでに経験してきたことから出てきた言葉だったのでしょう。丁寧に言い換えるならば、「私たちが救われるために必要なのは主イエスを信じることです。私たちのために十字架にかかって死んで下さり、復活して下さった主イエス・キリストこそ、まことの救い主であり、まことの神であることを信じて、その主イエスに自分の人生を委ねなさい。この救いは、信じる者のみに与えられるのではなく家族にも及んでいきます。」というキリスト教の中心的な教えになるのではないかと私は考えています。それは、家族の中でだれか一人が信じれば家族

も自動的に救われていく、ということではありません。主イエスを信じるということは、言い換えれば主イエスに身を委ねるということです。そして、その時には家族という大切なものをも主イエスに委ねるのです。そこに聖霊が働いて下さるのです。彼は真夜中であるにもかかわらず、パウロとシラスを自分の家に招いて傷の手当をし、自分と家族の者たち全部がパウロたちの語る主の言葉を聞く時を持ちました。そのことによって、彼と家族の者たち皆が洗礼を受け、主イエス・キリストの救いに与る者となったのです。

この場で共に礼拝をささげておられる方々すべてが、必ずしも、家族から賛同を得て毎週の礼拝に集っているわけではないと思います。また、これまで一生懸命に主イエス・キリストを信じ家族のためにお祈りもしてきたのに、そのことを家族に理解してもらうことさえできない、という方もおられるかもしれません。あるいは、私には家族などいない、いつも孤独でだれにも頼れない、という方もおられるかもしれません。しかし私は、そのような困難や苦しみにこそ、主なる神様はいつも目を注いでおられる、と確信しています。そして、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」という御言葉から、私は教会が「神の家族」と呼ばれることがある意味を考えさせられます。新約聖書のエフェソの信徒への手紙2章17節以下に次のように記されています。

「17 キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。18 それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。19 従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。22 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。」立川教会も、そのような神の家族として共に歩んでまいりましょう。